「タメニ」の意味表出と構文的特徴

—複文に見られる時間関係と意志性について—

于　　日　平

1．問題提起

接続助詞的に*1)働く「タメニ」には、理由と目的を表す二つの使い方がある。

1）風邪をひいたために、会社を休んだ。

2）病気を治すために、薬を飲む。

小論は、理由と目的を使い分けている「タメニ」が構文的にどのように異なっているかを、A：補文*2)と主文に描き出される二つの出来事の時間の前後関係、B：補文と主文の二つの出来事の意志性の有無、という角度から、明らかにすることを目的とする。

2．先行研究

「タメニ」を扱った従来の研究の中で、ここで取り上げたいのは、理由と目的の構文的制限を論じた奥津（1975）と（1986）である。(奥津（1976）（1986）では、代表形として「タメ」にしているが、意味が同じという前提のもとで、ここでは「タメニ」を代表させて論を進めることにする。)

奥津（1986）では、目的構文の「タメ」の四つの文法制限を指摘し、一方、理由構文はこれらの文法制限を一切受けないと述べている。*3)奥津が挙げた文法制限とは、次の四つである。

一、補文の主語と主文の主語とは、同じでなければならない。

二、補文・主文いずれの主語も有生［＋animata］のものでなければならない。

三、補文及び主文の動詞は、有生の主語による意志的動作を表すもの、［＋volitional］という素性を持つものでなければならない。

四、補文のテンスは、未完了形でなければならない。

しかし、この奥津（1986）の文法制限は、二つの出来事の時間の前後関係と意志性の有無との関わり合いについての検討が不十分なので、次のような疑問が出ている。

一つは、複文における「意志性」をどう捉えるかという問題である。次の「ある」「なる」「ようになる」「飲みたい」などは、一般的に非意志動詞として扱われる。しかし、これらも補文と主文の結びつきの中に置かれて、目的の「タメニ」として用いられることがある。奥津の言う『補文及び主文の動詞は、有生の主語による意志的動作を表すもの』とは、どういうことかを、意志動詞というカテゴリーの問題と関連させて検討する

必要があろう。

3）美しくあるために、いつも入念に化粧している。

4）彼は元気になるために、きちんと薬を飲んでいる。

5）自転車に乗れるようになるために、毎日練習している。

6）酒を飲みたいために、一生懸命に働いている。

7）何もしなければ分裂してしまうので、其れを防ぐために、政権は強権的にならざるを得ない。

また、「補文と主文の主語の一致」が必要であるとするが、次のような反例を挙げることができる。*4)受け身になれば、主語が別々になるのは、むしろ一般的でさえある。

8）赤組が間違いなく勝つために、我々が力いっぱい努力しよう。

9）子供がよく育つために、母親が育児を勉強しなければならない。

10）迷惑の気持ちを表すために、受け身が使われる。

さらに、奥津（1986）では、次のような「解釈次第で、理由にも目的にもなる」例を挙げ、その二義になる理由を次のように述べている。

『この文は補文・主文いずれの主語も「山田君」という人間の名詞であり、動詞も「出張する」「早退する」という意志動詞であり、テンスは補文が未完成で主文が完了である。つまり目的構文とも解釈できるが、「出張」を命ぜられたので、準備のために「早退した」と解すれば、理由構文である（p-94）』。

11）山田君は明日ニューヨークへ出張するために今日は早退した。

人間の名詞が主語になること、意志動詞、補文が未完了で主文が完了、という三つの条件下で、理由と目的の二義性が生じるという奥津の指摘は、理由構文と目的構文の繋がりと区別に対して、非常に示唆的である。しかし、例11のように、補文の出来事の発生が明らかに主文のそれより以後になりながら、主文の出来事を理由づける用法は、「タメニ」が表す理由構文の特徴として自然に感じるかどうか、かなり疑問に思う。*5)が、それよりもっと重要なのは、時間の前後関係と意志性の問題が理由と目的の意味の使い分けにどのように関わっているのか、その使い分けの文法的条件が何なのか、ということを、「タメニ」を中心にして解明することである。

以下、奥津の結論の不足を補いながら、より適切な説明を与えることを試みる。そして、表面に現れる文法制限を通して、その裏に隠される時間の前後関係、意志性の有無という「タメニ」文の特徴を明らかにし、それによって、理由構文と目的構文の中にある「タメニ」表現の位置づけを明確にしようと考える。

3．「タメニ」が表す理由構文と目的構文を特徴づける文法的条件について

論理的に言えば、理由と目的の表現を成立させる文法的条件は、補文と主文に描き出される二つの出来事の時間的な前後関係である。即ち、理由構文は、補文の出来事が主文の出来事を理由づける機能にあるので、主文の出来事の発生より以前か同時に起きなければならず、目的構文は、補文の出来事の実現が主文の動作によってもたらされるの

で、その発生が主文のそれより以後でなければならない。こう考えれば、「タメニ」が表す理由か目的かの意味決定は、二つの出来事の時間関係を示す相対的テンスが明確になれば、十分なはずである。つまり、補文の出来事の発生が主文のそれより以前か同時になれば、理由表現になり、その発生が主文のより以後になれば、目的表現になるということである。

ところが、これは論理的に、時間の角度から理由と目的との繋がり、区別を示すものであって、これだけでは、言語表現としての「タメニ」の特徴を説明することができない。というのは、「タメニ」が表す理由構文と目的構文には、表現の特徴として、二つの動作的な出来事の時間関係は発生の前後を基準とする継起関係にあることと、目的構文は補文も主文も意志性を持つものでなければならないこととの二つの条件を必要としているからである。*6)次の例を見られたい。(以下は、＊は非文、？？は許容度の相対的に低い用例、？は許容度の相対的に高い用例、と示す。)

12) ＊明日雨が降るために、神社へ行って祈った。　—目的の文—

13) ＊明日試験を受けるために、今日は図書館で勉強する。　—理由の文—

例12では、二つの出来事の発生の前後関係が守られていても、補文に意志性がないため、非文になる。また、例13は、補文も主文も意志性を持ってはいるが、補文の出来事の発生が主文のそれより以後になって、目的の意味に解釈されるのが普通であるにもかかわらず、主文の出来事発生の理由にしようとするので、「タメニ」の理由構文に現れる時間の継起性という特徴に反することになってしまうのである。

以下、3.1では、目的構文に見られる意志性の有無について、3.2では、理由と目的を表し分ける出来事発生の継起関係について、分析し、さらに3.3では意志性の有無と時間の継起関係との関連について、3.4では、補文・主文の文の性格の決定と理由・目的の意味決定の二段階構造について、総合的に考察することにする。そして、3.5では、前の分析と関連づけて、[名詞＋のタメニ] と [名詞＋であるタメニ] について調べてみることにする。

3.1. 目的構文に見られる意志性の有無について

意志性とは何かという正確な定義は難しい。ここでは広く、人間が意図的に行い、コントロールできる動作、変化や状態の実現と保持などを、意志性を持つものと考え、その了解のもとで、分析を進めることにする。*7)

目的とは、人間がある行為をすることによってもたらされる結果を予め予測し、それを目標に立てたものである。そのため、目的構文は、a）主文が表すのは意志性を持つ行為であること、b）補文の出来事の発生が主文のそれより以後になること、という二つの文法的条件が義務づけられることになる。ところが、「タメニ」の目的構文は、上に挙げた二つのほかに、さらに補文も意志性を持つものでなければならないという特徴を持っている。つまり、「タメニ」の目的構文は、主文の意図的な行為によって補文の出来事が引き起こされる動作目的であって、補文の出来事が実現される結果目的ではないの

である。

14）＊病気が治るために、毎日薬を飲んでいる。（例12も参照）

15）病気が治るように、毎日薬を飲んでいる。

例14と15を比較すれば分かるように、補文の出来事が、発生が主文のそれより以後になるだけでなく、意図的に行われる動作でなければ、「タメニ」の目的構文としては許容されないことになる。

鈴木重幸（1972）では、意志動詞の特徴として「命令と勧誘の用法を持つ」ことを挙げている。しかし、例３、４、５、６、７、10を見て分かるように、複文における意志性の有無の現れは主文末に使われるときを基準にする意志動詞のカテゴリー分類と必ずしも一致するとは限らない。補文と主文の結びつきで、人間が意図的に変化や気持ちの実現、状態の実現や保持などを図るという意味に解釈できれば、意志動詞と同じ働きをすることができる。さらに次の例を見られたい。

16）町では、子供の成長をよくするために、いろんな行事が催されている。

17）第二の行為を行うために、第一の行為は遂行される。

18）市民の健康を守るために、市にはどんな仕組みがあるでしょうか？

19）普段から書くための問題や感想、意見や材料を蓄えておくために、何か良い方法はないだろうか？

例16、17は、意志動詞の受け身であるが、意志性が潜在的に残っていると言えるだろうか。また、例18、19は、主文が明らかに存在を表すもので、意志的な動作を表す動詞とは認められ難い。となれば、「タメニ」の目的構文には、意志動作の目的のほかに、動的事象の存在*8)の目的もあると言わざるを得ない。従って、複文における意志性の有無は、意志動詞に限定してはならず、補文に対する主文の役割、主文に対する補文の働き、という相互影響の立場に立って、単語、複合形式を中心にする補文・主文の文全体が動作的なものを表すか、状態・結果的なものを表すかという文の性質として認識し直さなければならないであろう。このように考えれば、「ある」「なる」タイプの動詞、「意志動詞＋たい」の形、「～ようになる」の複合形式及び意志動詞の受身形などは、意志性を持つ動作的な側面と意志性を持たない状態・結果的な側面の両方を持っており、「タメニ」によって結合された補文・主文においては、動作的な側面が全面に引き出されて、目的構文を構成するようになったと解釈する方が妥当であろう。*9)

また、例８、９、10が示すように、「タメニ」文が要求する意志性の有無は補文・主文の主語の一致と直接に結びつくものではない。補文の出来事が意志性を持つもので、しかも主文の意志的な動作の影響を強く受ける場合は、動作主が異なっていても、目的構文になるのである（奥津（1986）に挙げた文法制限一を参照）。「タメニ」の目的構文にとって重要なのは、補文の出来事が主文の意志的な動作をきっかけにして行われる意志的な動作であるということである。そのきっかけを見つければ、主語が一致しなくてもよい。次の例20、21は、普通は二つの文の間にきっかけが見いだしにくいために、主文の行為と補文の出来事の関連が分からないため、目的として理解しにくい文になってい

る。しかし、逆に言えば、「アイスクリームを食べる」ことや「お寿司を買う」ことが「赤組の勝利」や「子供の大学合格」のきっかけになることが、もしあれば、いずれも目的の文として解釈できるようになる。

20) ＊赤組が勝つために、我々がアイスクリームを食べよう。

21) ＊子供が大学に合格するために、母親が昨日お寿司を買った。

「タメニ」の目的構文において、語彙的な意味の実現が構文に強く依存する動作的側面と状態的側面の両方を持つ中間的なものは、その意志性の顕在化（例えば、意図的に変化を求めることか、単なる変化か）は、かなり補文と主文の相互影響を強く受けているというふうに理解しなければならない。そして、直接に相互影響しているのは、個々の述語ではなく、述語を中心に形成される補文或いは主文全体が、状態・結果的なものか、動作的なものかということになる。

3.2. 理由と目的を表し分ける時間の継起関係について

理由と目的を区別させる時間的な条件は、二つの出来事の発生の前後関係であると前に述べた。「タメニ」文に現れる時間関係の特徴は基本的に、補文の出来事の発生が主文のそれより以前、同時になるか、以後になるか、という継起関係にある。そして、この相対的テンスとしての継起関係は、意志性の有無に密接にかかわり、理由と目的の使い分けに大きく関係していくことになっている。例えば、次の例を見られたい。

22) 風邪をひいた／ひいているために、会社を休んだ。

23) 風邪をひくために、わざと薄着をしている。

補文が同じく「風邪をひく」という意志性を持つ出来事であるが、例22では、その発生が相対的に主文のそれより以前か同時になるので、主文の出来事の発生を引き起こす理由としてしか働くことができず、それに対して、例23では、発生が以後になって、主文の意志的な動作によって実現される目的として働くことになる。つまり、補文の意志性の有無は相対的テンスによって大きく変わってくるのである。このように基本的に二つの出来事の間に存する継起関係に特徴づけられる「タメニ」文は、補文も主文も同じく意志性を持つ場合において、その継起性に基づいて理由と目的を区別しているのである。それは、継起関係に束縛されず、話者が主体的に二つの出来事を原因—結果的に結びつける「ノデ／カラ」のような理由／原因構文と著しく異なっている。

24) お腹を壊したので（ために）、今日一日中寝込んでいる。

25) 明日大学試験を受けるので（＊ために）、今日は徹夜で勉強する。

26) 病気になるので（＊ために）、暴飲暴食を止めなさい。

ところが、奥津（1986）では、前に挙げた例11のように、補文・主文が両方とも意志性を持つものでも、理由と目的の区別は相対的テンスの継起関係に関係なく、解釈の問題だと説明し、次の例を挙げて、『補文・主文の主語は人間ではあるが、同一ではないから、理由構文としか解釈できない（p-96）』と、主語の一致か不一致かが決定的な要因だと主張している。

27）？山田君が明日大阪へ出張するために秘書が切符を買いに行った。

主語が一致しなくても、目的構文になることを、すでに3.2の所で述べた。例27が目的構文になりにくいのは、「秘書が切符を買いに行く」ことと、「山田君が明日大阪へ出張する」こととの間に、「出張」が「切符を買いに行く」ことによって引き起こされるきっかけ性が想像しにくいからであろう。理由構文としても、補文も主文も意志性を持つものでありながら、時間の継起関係に反するために、いささか不自然に感じるが（これは「ノデ／カラ」に置き換えると、その不自然さがなくなることからも、裏付けられる）、まだ、理由構文として許容されよう。これは次のような理解に立っているからだと解釈される。即ち、例27での「明日大阪へ出張する」ことを、すでに決定済みの事柄として理解し、主文の行為をきっかけにして、何か動作をするという意味がなくなっているからだと考える。このように、意志性を持つ補文の出来事が相対的に主文より以後に発生する「タメニ」の理由構文は、出来事自体がすでに主文より以前に確定した既定事実であるという文法的条件を必要とすることになる。そして、既定事実の理解がしやすい次の用例が例27より許容度が上がると感じるのも、そのためであろう。

28）？津波が来るために（ので）、ジョンはヨットを陸にあげた。

29）？明日お客が来るために（ので）、今日は準備で忙しい、(p-95、96)

例28と29で表される「津波が来る」、「お客が来る」などは、主文にとって発生が以後になってはいるが、「天気予報によると、津波が来る」、「お客さんが来ることになっている」に置き換えても同じ意味に解釈されることからも分かるように、予定としてすでに存在する既定事実になっているので、その既定事実を理由にして行為を行ったのである。そして、その既定事実を行為の理由にする理解は例28、29が27よりずっとしやすいので、許容度が上がると感じさせたのであろう。従って、予定として既定事実化できるのは、このような表現が許容される文法的条件と考えざるを得ない。予定として既定事実化しにくい場合では、明らかに非文になることになる。

30）＊電車が故障するために、会社に遅れた。

31）＊病気が治るために、薬をたくさん買った。

このように、「タメニ」が表す理由構文と目的構文は、二つの出来事の時間の継起関係に従って使い分けているという基本的なテンス特徴を持つと同時に、補文が相対的に未来になるときに、出来事を既定事実化することができるという特殊な場合に限って、理由構文として許容されることになる。既成事実化すれば、状態・結果的なものになるので、意志性が消えることになり、「タメニ」文を特徴づける意志性の有無が守られることになると考えられる。そして、この時間の継起関係の特徴は、発話時を基準時にする話者の判定を表すモダリティ形式との共起を制限することによって、一層はっきりと現れてくる。

32）＊友達が来るかもしれないために、ずっと家で待っていた。

33）＊津波が来そうなために、ジョンはヨットを陸にあげた。

話者が主体的に二つの事柄を原因―結果的に結びつける表現は、発話時を基準にする

もので、客体的に継起関係を基準にする表現と全く対立する表現である。話者の主体的なモメントを入れた構文に、時間の継起関係を基準にする表現の「タメニ」が用いられにくいことになるのであろう。*10)

3.3. 意志性の有無と時間の継起関係の関連及び補文・主文の文の性格の決定

3.1と3.2で、意志性の有無と相対的テンスの関連について見てきた。複文において、二つの出来事の間に成立する関係を構成しているのは補文と主文の文全体であって、述語という単語ではない。そして、「タメニ」が表す理由か目的かの意味決定は、補文と主文が全体で、状態・結果的なものか、動作的なものかを表す文の性格、そして、その異なる性格の文の組み合わせと相互の働きかけによるのである。そのため、複文の意味表出は、補文と主文の文の性格の決定と、文の組み合わせ方と相互の働きかけによる意味決定という二段階を経て行われるものと考えている。

文の性格が状態・結果的なものか、動作的なものかを決めるのに関わるのは、述語に使われる単語の語彙的な意味・複合形式の意味、相対的テンスである。そして、それらによって総合的に決められた文の性格は、a）状態・結果的なものにしかならないもの、b）動作的なものにしかならないもの、c）両方の性質を持つ中間的なものという三つがあり、特に両方の性質を持つ中間的なものは、補文か主文のどちらかに現れると、もう一方の文の働きかけを受けることによって、両義に働くことができるようになる。

単語の語彙的な意味、複合形式の意味、相対的テンスの働きと文の性格の決定との関係をまとめると、次の**表1**になる。

表1　補文と主文の文の性格を決定する諸形式

文の性格／形式	状態・結果的なもの	中間的なもの	動作的なもの
補文	1）形容詞・非意志動詞 2）意志動詞（使役態と受け身を含む）のタ/テ/イル/テイタ形 3）状態を表す複合形式（可能態を含む） 4）予定として既定事実化できる出来事	1）意志動詞の受け身のル形*11) 2）[意志動詞連用形＋たい] 3）[意志動詞未然形＋ない]*12)	1）[形容詞＋ある] 2）[～なる]、[～ようになる] 3）意志動詞のル形
主文	1）形容詞・非意志動詞 2）状態を表す複合形式（可能態を含む）	1）意志動詞（使役態と受け身を含む）タ/テイル/テイタ形 2）意志性を持つ複合形式のタ/テイル/テイタ形 3）動的な存在を表す[ある／ない][必要／役に立つ]のような単語	1）絶対的テンスとして未来になるa：意志動詞のル形b：意志性を持つ複合形式c：[意志動詞＋未来志向のモダリティ形式]

上の表に対して、さらに二点を補足説明する。

a）補文か主文に現われる形式には、二つのタイプがある。一つは、状態・結果的か動作的か、どちらかの性質を強く持っているために、どんな条件下でも、持ち前の性質を変えることはないものである(例えば、補文・主文に現れる形容詞や非意志動詞など)。もう一つは、潜在的にある持ち前の性質の顕在化が組み合わせになるもう一方の働きかけに強く依存するものである（例えば、補文にある［形容詞＋ある］や主文にある動的な存在を表す[ある／ない]など)。依存タイプの形式は、もう一方の働きかけによって、状態・結果的にも動作的にも機能しうる。

b）どんな組み合わせにおいても、理由構文には、主文に意志性を持つ形式のル形や、話者の心的態度を表すモダリティ形式が現れることはない。これは、「タメニ」が理由と目的を表し分ける絶対的テンスにおけるテンス・ムード的な特徴といえよう。従って、文末のモダリティ形式がテンス・ムードの性質を持つという意味で、理由・目的の意味表出に関わっているのである。そして、その関わりは、「タメニ」文の意志性と相対的テンスに現れる特徴を一層強めるもので（例えば、文末に命令形が使われると、意志性＋働きかけ性によって「タメニ」で理由構文を作る可能性を排除してしまうなど)、結論に影響が出ることはないと考える。

3.4. 異なる性格の文の組み合わせと理由・目的の意味決定の関連について

性格の異なる補文と主文は、「タメニ」によって様々な組み合わせ方で結びつけられている。組み合わされた補文と主文は、それぞれ持ち前の文の性格を持って影響しあいながら、理由か目的かを決めていくのである。その組み合わせ方に基づいた理由と目的の使い分けは次のようになる。

表2　異なる性格の補文と主文の組み合わせかたと理由・目的の意味決定

理由構文：

補文／主文	動作的なもの	状態・結果的なもの
動作的なもの	×	○
状態・結果的なもの	○	○

目的構文：

補文／主文	動作的なもの	状態・結果的なもの
動作的なもの	○	×
状態・結果的なもの	×	×

補文と主文の組み合わせ方において、理由構文は意志性を要求しないため、基本的に自由である。それに対して、目的構文は、次の二つの組み合わせが相互依存の性格が強く、意志性の強いもう一方の働きかけがないので、表現として成立しにくくなることになっている。

a）補文にしか現れない依存的タイプの［形容詞＋ある／なる／ようになる］と受け身、動的な存在を表す主文の述語の組み合わせ：

34）＊綺麗になるために、いつも入念に化粧がされている。

35）＊自転車に乗れるようになるために、練習がある。

b）補文も主文も依存的タイプの形式の組み合わせ：

36）＊事実を伝えたいために、率直な意見が述べられた。

上の表を見て分かるように、理由構文と目的構文の組み合わせ方は基本的に次の通りになる。理由構文：A状態・結果的なもの＋動作的なもの、B動作的なもの＋状態・結果的なもの、C状態・結果的なもの＋状態・結果的なもの。目的構文：D動作的なもの＋動作的なもの。このように、補文に現れる変化や気持ちの実現、状態の実現や保持などの形式は主文の意志的な動作の働きかけを受けて潜在的な意志性が顕在化すること、また、主文に現れる受け身や動的な存在を表す形式は補文の強い意志性のために動作的な性格が持たせられたこと、という組み合わせによる相互作用で**2**の部分で挙げた不明な所や反例を説明できることになると考える。これは、複文における相互依存性を示すと同時に、語彙的なもの、相対的テンスなどが補文と主文の文の性格を決め、状態・結果的か動作的かという文の性格が直接に複文の意味を決めていることも示すことになるのである。

4．補文が［名詞＋であるタメニ］と［名詞＋のタメニ］について

補文が［名詞＋であるタメニ］と［名詞＋のタメニ］であるとき、基本的に**3**の結論を当てはめることができる。特に［名詞＋のタメニ］では、相対的テンスがニュートラルなために、相互依存の性格が一層明確に現れている。

4.1. 補文が［名詞＋であるタメニ］について

［名詞＋である／でない／であった／でなかったタメニ］の形は、話者が物としてではなく、属性や性質の判定を表しているため、基本的には理由構文にしかならない。

37）同校の学生でないために先生の講義を聴くことができなかった。

まれに目的の文になる場合もある。

38）人間であるために基本的な権利を獲得しなければならない。

例38が属性の判定を表す「である」と同じものと認める前提において、目的構文になれるのは、a）補文が相対的テンスとして現在・未来に解釈するル形を取っていること、b）補文が「人間らしさ」という性質を保持する意味で、意志性が持たせられること、c）主文の意志的な動作の働きかけを強く受けていること、などがあるからであろ

う。*13)

4.2. 補文が［名詞＋のタメニ］について

［名詞＋のタメニ］の形は、相対的テンスに対してニュートラルなため、補文の名詞の語彙的な意味が理由と目的の使い分けに大きく関わってくる。

39）去年、冷害のために稲がほとんど取れなかった。

「冷害」は意志性が持てないために、理由にしか解釈されないであろう。

理由にも目的にも解釈できる名詞が来て、しかも主文が強い意志的な動作であれば、理由と目的の意味解釈に揺れが生じてくる。

40）旅行のために、休暇を取った。

これは、「旅行」のような名詞が、a）意味的に理由としても目的としても働くことができること、b）相対的テンスとしてニュートラルであること、c）主文が強い意志的な動作で、しかも未来志向でないこと、などによって理由と目的を区別させる文法的条件が曖昧になったからであろう。*14)

4.3. 主文が［動名詞＋である］について

補文が［名詞＋のタメニ］で、主文が［動名詞＋である］という組み合わせの場合は、理由と目的の二義になる。*15)

41）学園祭のために、来週から休校である。

42）旅行のために、彼は欠席だ。

例41、42のように、「休校」や「欠席」は状態・結果を表すものと解釈すれば、「学園祭」や「旅行」がその理由になり、「休校する」や「欠席する」のように動作として解釈すれば、「学園祭」や「旅行」を目的に理解する可能性が生じてくることになると考える。従って、例41、42の二義性は、4.2に挙げたa）b）c）と同じ結論で説明することができると思う。

5．まとめ

上に述べたことを次のようにまとめることができる。

一、複文における意味の決定は、二段階に分けて行われている。単語の意味、複合形式の意味、相対的テンスが総合的に働いて、まず補文と主文のそれぞれの文の性格が状態・結果的か、動作的か決められる。つぎに、異なる性格の文は様々な組み合わせ方を構成し、その相互作用によって最終的に複文の意味が決められる。

二、「タメニ」文を特徴づける文法的条件は、理由と目的を表し分けると同時に、他の類義表現との相違を示している。例えば、相対的テンスとしての継起性は、「タメニ」文において、意志性の有無を決めることによって、理由と目的を区別させていると同時に、継起関係でない「ノデ／カラ」との違いを示しているのである。

三、文の性格を決める文法的条件が欠けたり、二義に解釈できたりするようになれば、

理由と目的を区別させる境界線が曖昧になり、意味表出に揺れが生じてくる。

四、依存的タイプの形式は、典型的な状態・結果的なもの、あるいは動作的なものと組み合わせることによってはじめてその文中での働きが明確になる。特に目的構文では補文主文ともに意志性が必要なので、中間的なものと依存的タイプの形式、依存的タイプの形式同士の組み合わせは成立しにくい。

今回は「タメニ」を中心に、「タメニ」文の意味表出と構文的特徴を分析してみた。しかし、「タメニ」が表す理由と目的はそれぞれ、理由表現と目的表現のシステムの中に位置づけられているので、他の類義表現との比較を通して明らかにする必要のある問題もたくさんあると思う。今後、「ノデ／カラ」または「ヨウニ」と比較して、複文における理由構文と目的構文の表現システムを究明してみたい。

注

1）奥津（1975）、（1986）では、形式副詞と名付けている。ここでは、補文と主文を結びつけるという機能を重視して、接続助詞とする。

2）従属節という言い方もある。全体を文と言うので、節と名付けた方がいいのではないかとも考えたが、奥津氏論文引用のことがあって、補文の呼び方に統一している。

3）奥津（1986）の p81と p94。

4）用例と指摘は鈴木重幸氏と高橋太郎氏による（p82）。また、前田直子（1995）《日本語類語表現の文法（下）複文・連文編》では、『タメニ＝同一主体による動作や、「必要・有用だ」という判断を表す。述語の、目的を表す。』と述べている。しかし、同書の塩入すみ（1995）では、『主節の動作主と関係づけがしやすいものは許容度が高い』と指摘し、次の例を挙げている。

　娘が夕食を作るために、母親は買い物に行った。

　さらに、南不二男（1976）《日本語の構造》では、目的構文の「タメニ」は主格を含まないA類に分類され、主格を含むB類の理由構文の「タメニ」と異なるとしている。

5）研究室の日本人にアンケート調査を行った。理由に解釈するのはかなり不自然であるという結果が出ている。また、集めた350ほどの用例カードには、そのような用例が見つからなかった。

6）理由／原因と目的の他の表現と比較すれば、その相違が一層明確になるが、次回に譲ることにする。

7）『物事をしようとする、または、しまいとする積極的な心ぐみ。何かをする、どちらにするかを選択、判断して実行しようとする気持ち。知識、感情に対する精神作用の一つ。』《日本国語大辞典・意志の項》

8）「進展がある／ない」という用法がある。動作を含みとする存在の用法と考えて、動的事象の存在と名付けた。

9）［意志動詞＋たい］に現れる意志性は、［～を飲みたい］と［～が飲みたい］の両方が存在することにも繋がっていると考えられる。

10）これは、「ノデ／カラ」との比較を通して、さらに詳しく分析する必要があるように思う。今後の論文に譲る。

11）意志動詞の受け身が表す中間的な性格を、構文的にどのように分析すればよいかに対して、今の筆者にはまだ納得のいく説明がない。これは、目的語が主題になって、動作主が隠れるときの目的表現にも密接に関係してくるので、今後の課題にしたい。

12）用例が少ないが、次のような例がある。

　犯罪に加わらないために、わざと自分の手を切った。

13）このように考えれば、未来における状態を目的に立てても良さそうであるが、そのような例は見つからない。それは、「タメニ」の目的構文は動作目的を表すという制限によるものであろう。

＊日本語を勉強しているために、日本に来た。

○東大に合格しているように、世間の目をごまかしている。

14) どんな名詞が二義に使われうるかについて、まだ調査が不十分で、はっきりしたことは言えない。傾向として、目的が理由よりかなり限定されるような気がする。

○地震のために家が崩れた。

＊地震のために頑張ろう。

15) 動名詞にはサ変動詞が多いことはいうまでもない。このような使い方は非常に少ない。

参考文献

奥津敬一郎　《形式副詞論序説》都立大人文学報104号　1975．1

《いわゆる日本語助詞の研究》凡人社　1986．4

森田　良行　《日本語表現文法》アルク出版社　1988．5

北原　保雄　《日本語助動詞の研究》大修館書店　1981．11

南　不二男　《現代日本語文法の輪郭》大修館書店　1993．7

鈴木　重幸　《日本語文法・形態論》むぎ書房　1972．5

仁田　義雄　《条件づけとその周辺》日本語学　1987．6

言語学研究会・構文論グループ　《条件づけを表現するつきそい・あわせ文（二）—その2・原因的なつきそい・あわせ文—》教育国語　82号　1985．9

甲田　直美　《情報把握から見た日本語の接続助詞》日本語学　1994．9

岩崎　卓　《ノデ節、カラ節のテンスについて》国語学　179　1994．12

今尾ゆき子　《カラ、ノデ、タメ　—その選択条件をめぐって—》日本語学　1991．12

前田　直子　《「引用節」を導く「～ように」の意味・用法》国語学会発表要旨平成6年春

《日本語類義表現の文法（下）複文・連文編　宮島達夫　仁田義雄編》（スルタメ（ニ）、スルヨウ（ニ）、シニ、スルノニ　—目的を現す表現—）くろしお出版　1995．10

塩入　すみ　同上書（スルタメニとスルタメニハ　—目的を表す従属節の主題化形式と非主題化形式—）

山岡　政紀　《複文の研究（下）仁田義雄編》（従属節のモダリティ）くろしお出版　1995．5

（筑波大学大学院　博士課程文芸・言語研究科　日本語学）